論　文

『経済学批判要綱』における資本の流通過程（下）

――流動資本と固定資本の諸規定の検討を中心として――

水谷謙治

はしがき
第一章　資本の流通過程に関する「一八五九年プラン草案」の内容
第二章　流動資本と固定資本の諸規定について（一）〈以上前号所載〉
第三章　流動資本と固定資本の諸規定について（二）
第四章　総括〈以上本号所載〉

第三章　流動資本と固定資本の諸規定について（二）

前章の考察から、『要綱』における流動、固定資本の規定には、「一般的規定」と「特殊的規定」とでもよびうる二様のものがあることが明らかになった。

「一般的規定」においては、資本だということが、商品、貨幣、生産要素という諸形態をとりながら増殖する価値

主体の運動そのものという面と、ある特殊形態へ拘束されているという面とでつかまれており、このばあいには、資本がどの局面どの形態にあるかということやその資本がどういう素材のものかということは度外視されていた。他方、「特殊的規定」においては、資本が運動しつづけるものであると同時に固定されるものだということからすすんで、二重の特殊な姿態で実存する（あるいは二種類の資本に分裂する）ものとして、すなわち生産局面に留まってそこで消費しつくされる資本および使用価値として流通局面に入る資本として規定されていた。そして、「一般的規定」は『資本論』「第二部第一篇」の産業資本に関する規定に共通し、「特殊的規定」はある面では「第二篇」の流動資本、固定資本の規定に共通していることが明らかになった。

しかし、この「特殊的規定」の叙述中には、右のようにばかりいえない叙述も多く、流動資本と流通資本との混同だと思われる叙述も多数みうけられる。したがって、流動、固定資本の二重の規定間の関連や、それらの概念および関連に関する『資本論』との関係を正確に理解するためには、右の点のより立ち入った検討が必要である。

さしあたってまず、「特殊的規定」のうち、流動資本と流通資本との混同が犯されているようにみえるいくつかの叙述を例示することから始めよう（便宜上、本章にかぎって引用文のわきに通しナンバーを付すことにする）。

1 「たとえば機械製造業者の流通生産物が機械であるのは、綿織業者のそれがキャラコであるのと同じであって、機械は機械製造業者にとっては同一の仕方で流通に全部的に入り入む。それは彼にとっては流動資本（Capital Circulant——以下前章と同様 c.c. と略す、引用者）であり、これを生産過程で使用する製造業者にとっては固定資本である。なぜなら（それは）前者にとっては生産物であり、後者にとってだけ生産用具だからである」(1)（S. 611）。

（1）　右の叙述と『資本論』のつぎの叙述とを対照されたい。

「たとえば、機械製造業者にとっては機械は商品資本として流通する生産物であり、したがってA・スミスの言葉でいえば、手放され、持ち主を取り替え、さらに流通する。それならば、機械は、彼自身の規定によれば固定資本ではなくて流動資本であろう。このような混乱もまた、スミスが、生産資本のいろいろな要素の流通の仕方の相違から生ずる固定資本と流動資本との区別を、同じ資本が生産過程では生産資本として機能するが流通部面では流通資本すなわち商品資本または貨幣資本として機能するかぎりで順々に通って行く形態的区別と混同していることから生ずるのである」(M. E. Werke, B. 24, S. 194, 訳〈大月〉P.237, 以下『資本論』からの引用は同書からのものとし、また『資本論』をK.という略号で示すことにする)。

[2]「……利潤が実現されるのは、実際上資本が流通に入ることによってだけであり、したがって流動資本(C.C.)としての資本形態においてだけであって、固定資本としての資本形態ででは決してない」(S.610)。

[3]「一般にある資本は、それが流通に入りこみ、ついでそれから復帰するその形態でだけ所得をもたらすことができる。……つまり固定資本は流動資本(C.C.)の形態でだけ所得をもたらすことができるのである」(2)(S.621)。

(2) 『資本論』の叙述――「最後に、固定資本によって利潤がえられるのは固定資本が生産過程に留まっているからであり、流動資本によってえられるのは流動資本が生産過程を去って流通させられるからだというまったくまちがった説明によって、――可変資本と不変資本の流動的成分とが回転については同じ形態をもっているために価値増殖過程および剰余価値形成での両者の本質的な区別がおおい隠され、したがって資本主義的生産の全秘密がますます不明にされる」(S. 200, 訳 P. 244)。

[4]「スミスは貨幣について、これを流動資本(C.C.)と名づけるべきか、固定資本と名づけるべきかに当惑している。貨幣は、それがつねに流通――それ自体総生産過程の一契機――の用具としてだけ役立つかぎりでは、固定資本――流通用具としての――である。だが貨幣の使用価値それ自体は、流通することだけであって、本来的生産過程に

も、個人的消費にも決して入りこむことではない。貨幣はたえず流通過程に固定されている資本部分であって、この側面からみれば流動資本（C. C.）のもっとも完成された形態である。他方からみれば、貨幣は用具として固定されているから、固定資本である」[3]（S.604）。

（3）『資本論』の叙述――「（しかし、貨幣は決して生産資本すなわち生産過程で機能している資本の一形態ではない。それは、いつでも、ただ、資本がその流通過程のなかでとる諸形態の一つであるにすぎない）」（S.206，訳 P. 251）。

[5]「労働者の給養品は生産過程から生産物として、結果として現れでるが、しかしそれはそのものとしては生産過程に決して入りこまない。なぜならそれは個人的消費にとって完成生産物であって、労働者の消費に直接入りこみ、それ〈消費〉と直接交換されるからである。したがってそれこそは、原料や労働用具とは区別されて、すぐれて流通資本（das circulating capital）である」（S.567）。

[6]「2）資本と労働力能のあいだの小流通。……この流通に入りこむ資本部分――給養品――はすぐれて流動資本（C. C.）である」[4]（S.570）。

（4）『資本論』の叙述――「……生産物が、その使用形態からみて、労働材料としてであろうと労働手段としてであろうと生産資本の要素をなすことは決してできないというばあいもありうる。たとえば、生活手段はそうである。それにもかかわらず、それはその生産者にとっては商品資本であり、固定資本と流動資本と両方の価値の担い手である。そして、その生産に充用された資本が……自分の価値を全部生産物に移しているかそれとも部分的に移しているかにしたがって、この生産物は、あるいは固定資本の、あるいは流動資本の、価値の担い手になるのである」（S.207―208，訳 P.253）。

以上の叙述をみ、また『資本論』の叙述とそれらとをくらべてみるかぎりでは、右の文中で固定資本と対応されている流動資本は、事実上の流通資本にほかならず、したがって右の文中では、両者の混同が犯されているようにみえ

る。

そこで以下、この「混同」とみえる事態の内容を検討することにしよう。

このばあい、まず、流動資本と固定資本の「特殊的規定」において、流動、固定の両資本を区別する仕方、ないし基準そのものに着目せねばならない。

その基準は、ともに価値としては流動するにしても、使用価値（素材）それ自体として流通に入るかそれとも使用価値として生産過程に留まったままで消費されつくすかどうかという点におかれている。すなわち、

7 「生産局面からあゆみでる資本とこの局面のなかにふくまれている資本とのこの対立から、流動資本（frusiges Kapital）と固定資本の区別が生じる。後者は、生産過程に固定され、生産過程それ自体のなかで消費される資本である」（S.570）。

8 「賃銀として流通する資本」（「給養品」）は「それの素材的側面からみて、使用価値としては、流通から決してあゆみでないし、また資本の生産過程に決して入りこまないのであって、それはつねに……結果として、この生産過程からつきだされる。その一方これと反対に、固定資本として規定された資本部分は、……使用価値としては、生産過程から決してあゆみでないし、また流通に決して二度と入りこまないのである。後者が価値として（完成生産物の価値の部分として）だけ流通に入るのに対し、前者は価値としてだけ生産過程に入りこむ」（S. 572—573）。

右のように、使用価値として流通に入るか生産過程に留まったまま消耗されつくすかという点は、たしかに流動資本と固定資本とを区別する一般的、基礎的な契機ではあるが、より決定的契機は、生産資本の価値がどのように流通するか——一時に全部的に流通するかそれとも徐々に断片的に流通するか——という点にある。(5) 機械であろうと生活

手段であろうと、それらが使用価値（素材）として流通に入るかぎりではまったく同じであるから、単に使用価値（素材）として流通に入るかそれとも素材として生産過程に留まったままでいるかという区分だけでは、流動資本と流通資本とを区別することができなくなってしまうであろう。

（5）「ここで考察される資本部分の流通は独特なものである。**第一に**、この部分はその使用形態で流通するのであり、**しかも**、それがこの資本部分から商品として流通する生産物に移って行くのにつれて、だんだんに少しずつ流通するのである」（K. B. Ⅱ, S.159, 訳 P.194, ゴチック引用者）。

では、当面の問題に関する当時の研究は、こうした区別の仕方のみに留められていたのだろうか？　また、この区別の仕方と密接に関係すると思われる前述の「混同」とみえる事態は、スミスらの混同とくらべてどう評価すべきであろうか？

スミスらにみられる流動資本と流通資本との混同は、彼らが商品に表示される労働の二面性、価値形態、商品の変態、剰余価値、不変資本と可変資本、等の基礎的理解を欠いている点を別にしても、第一に、資本価値はその運動上で必然的に三つの姿態変換を行なわざるをえず、資本はこの諸変態をとおしてつねに流動しつづけることを本質とする価値主体だという把握に失敗していることをあらわしている。第二に、どの資本も価値としては三姿態をとって流通するかぎり、流動、固定の両資本を区分する契機はこうした諸姿態そのものの区別にではなくて、そのうちの生産資本の諸要素の価値がいかに流通するかという点に求めるべきであり、そしてその点はまた、各要素がはたす価値形成上の区別にもとづいている（それはまた各要素の素材の相違にもとづく）、という把握に失敗していることを示している。このあとの方の点は、彼らがときには事実上で、生産資本内部での素材的区別という正しい立場にたつばあいでも、その素材的区分を直接に形態上の区別と同一視してしまい、右の諸関連をつかみえなかったことを示している

ともいえよう。

マルクスのばあいはどうだろうか？

彼が当時すでに、労働の二面性を始めとする前述したような基礎的諸前提をつかんでいたことは、ここに引用するまでもなく明らかであるし、第一の点の把握についても、前章の流動資本と固定資本の「一般的規定」に関する考察からみて明瞭である。(6)

(6) 前号二十三ページ〜二十六ページ、および二十九ページ〜三十ページ参照。その他『要綱』五三一ページ、六十一ページ等も参照。

それゆえ、流動資本と固定資本の「特殊的規定」（両者の区分づけ）が、スミスらの混乱や誤謬を根本的に批判する正しい理論的諸前提から引きだされていることは明らかである。

第二の点については、まずつぎの諸叙述をみられたい。

9 「生産過程の内部での区別、《すなわち》初めに労働手段と労働材料、最後に労働生産物は、いまや流動資本（C.C.）（最後の二つ）(7)と固定資本として現れる。単にその素材的側面からみた資本の区別立てが、いまや資本の形態それ自体のうちにとり入れられ、また資本を分化させるものとして現れる」（S. 590）。

(7) 前章注にしたがって、「（最初の二つ）」とあるのを訂正。

10 「過程それ自体の内部では労働諸要素と他の二つの要素との区別は、形態からみて、単に、一方が不変的価値として、また他方が価値産出的なものとして規定されるということだけであった。……だがいまや流動資本（C.C.）（原材料と生産物）と固定資本（労働手段）との区別においては、諸使用価値としての諸要素の区別が同時に資本としての資本の区別として、資本の形態規定において措定されている。単に量的であった諸要因相互の関係は、いまや資本

それ自体の質的区別として、また資本の総体運動（回転）を規定するものとして現われる」（S．583）。

11「固定資本と流動資本のあいだのこうした区別は、まず第一に資本の素材的定在または使用価値としての資本の定在の、流通に対する関係行為にもとづいている」（S．625）。

12「セーによれば、《固定資本とは》『ある生産種類に拘束されて、その結果もはや他の生産種類には転用されえない』資本である。資本とある一定の使用価値、生産過程にとっての使用価値との同一視。価値としての資本がこのように……生産の内部での使用価値に拘束されているということは、ともかく重要な側面である」（S．535）。

13「A・スミスははじめ流動資本（C．C．）と固定資本とを生産過程におけるそれらの規定にしたがって区別する。あとになって彼は」この「区別そのものの考察には属さない」区別をもちこむ（S．628）。

14「固定資本は生産物の価格に継起的にだけ入り、したがって価値として継起的にだけ還流する。流動資本（C．C．）がより短期間に全部的に流通するのに、固定資本はより長期的に断片的に還流する」（S．609）。

15「……流動資本（C．C．）と固定資本は……現在では、資本の二つの異った実存様式として同時に措定されている。流動資本と固定資本がこのようなものとなるのは、それらの復帰（リターン）様式の相違によってである」（S．625）。

以上の引用文においては、「特殊的規定」における流動資本と固定資本の区別は、資本の流通様式の相違にあり（引用文10、11、14、15）、その相違は生産過程内部での資本の素材的区分にもとづいているが（引用文9、10、13）、セーらはこの素材的区分を直接に形態上の区分と混同している（引用文12）、という視点が示されている。

それゆえ、資本が素材（生産物）として流通するか生産過程に留まって消費しつくされるかという「特殊的規定」での流動、固定資本の区別の仕方（そのもとでの諸考察）には、単に流通資本と生産資本の区別以上のものがふくま

れており、その区別の中心視角は、生産素材として存在する資本（労働手段、原材料、給養品）と流通との特殊な関連という点におかれていることがわかる。つまり、右の区別立てにおいては、事実上で、生産資本の諸要素の素材形態によって規定されるかぎりで、それらの諸要素の価値の流通様式が問題となってゆかざるをえぬ視点がふくまれていることがわかるのである。

だからこそ、『要綱』では、右の基礎的区別立てによりつつ、もっぱら生産過程に留まって消費される資本の諸要素が、その素材的区別において流通上どういう特有の関係をもたらすか――とくにこのさい労働手段としての固定資本の諸特質はどうか――が究明されてゆくなかで、さきの引用文（14）にみられたような決定的区分さえ折出されているのである。[8] 換言すれば、『要綱』ノートの進行は、未整理ではあれ、まず、さきの基礎的な区分基準をとらえ、そのもとで主として流動、固定資本の諸特徴を追求してゆくなかで、この基準に留まらず、流動、固定資本の決定的特質やその他の諸特質をも明らかにしていったという筋道をとっていると考えられる。つぎの叙述もこの点を例示しているといえよう。

「われわれはこれまで固定資本をつぎのような側面、すなわち固定資本の諸区別が本来的流通過程によって措定されるような側面からだけ考察してきた。このような側面からすれば、なお別の諸区別が生じるであろう。第一に、固定資本の価値の復帰は継起的であるが、他方流動資本（C.C.）にあっては価値の実存が使用価値のそれと合致するから、流動資本のどの部分も全部的に交換される《といった区別》。第二に……対自的に考察されたばあいの資本の回転時間におよぼす固定資本の影響から《生じる区別》……ついで固定資本が更新、維持される様式」（S．578）。[16]

（8）価値として一時に全部的に流通するか徐々に断片的に流通するかというこうした特徴づけは、使用価値として流通に

入るか生産過程に留まって消費しつくされるかという主要な区別立てのなかで、いわば附随的にでてきた二次的なかたちで指摘されている。そのことは、流動資本と固定資本の考察の最終部分（流通過程の最後の部分）においても、両資本が「資本の二つの異った実存様式として同時に措定される」ようになるのは、「それらの復帰様式の相違によってである」（S．625）と書かれた直後に、「区別は次の点にある」として、最初の基礎的な区分基準が示されていることからもわかる。

さらに、流動資本と固定資本との前述した区別およびそれとの関連での「混同」に関する当面の問題については、つぎの諸点にも留意すべきである。

第一に、さきの区別立てによる固定資本（素材として生産過程に留まったままで消費される資本）は、「第一の意義における固定資本」（S．520）、あるいは「固定資本の第一の規定」（S．573）とよばれ、固定資本のその他の区別立てをも明らかにする観点が示されていること。

第二に、「機械は流動資本（C．C．）である」とか「固定資本は流動資本を通じてのみ所得をもたらす」と同義にのべられるさいの流動資本については、ノートの最終部分の二、三箇所で「一種の流動資本」（C．C．）という表現がつかわれていること。すなわち、

[17]「資本の生産過程を想定するならば、あらゆる資本は一種の流動資本の形態でだけ還流する」（S．622）。

[18]「固定資本の価値は一種の流動資本の形態で復帰する」（S．622）。

また、つねに流通内存在たる給養品は「すぐれて流通資本（bas circulatating capital）である」（S．567）という表現もあること。

第三に、流動資本と固定資本の「一般的規定」と「特殊的規定」との混同を批判したつぎの文章も、これまでにみてきたマルクスの正しい視点との関連でみるならば、事実上で、流通、流動資本の区別を示しているものと解しうること。

[19]「ついで固定資本が更新、維持される様式。これは経済学者たちの所論では、固定資本は流動資本（C.C.）を媒介としだけ所得をもたらすことができる等といった形態で現れる。この最後のものは結局、固定資本が流動資本とならんで、またそれの外で、特殊な自立的実存として現れるのではなくて、固定資本の転化された流動資本として現れるばあいの、契機の考察にほかならない。だがわれわれがさしあたりここで考察しようと思うものは、外からのではなくて、固定資本が生産過程に内包されたままでいるということによってあたえられるかぎりでの、固定資本の関連である。それは、それが生産過程それ自体の一契機であるということによって措定されている」（S. 578—579）。

[20]「固定資本が価値増殖におよぼす影響を始めて強調したリカードは、以上に引用した個所からみることができるように、これらの諸規定（第一に固定資本の必要再生産時間の長さ、第二に流通時間の長さ、第三に生産期間の長さ、等の諸規定——引用者）をすべてごちゃまぜにしている」。「第一のばあいが固定資本に特有のものである。他のばあいは、非流動的な（nicht flussig）、固定された、総流通過程のなんらかのある局面に固定された資本の範疇に属する」（S. 577—578）。

そこで右の三点をまとめてみると、一方では、「第一の意義における固定資本」に対応する流動資本は、本来的流通過程に素材として実存する資本だというかぎりで流通資本と共通する側面をもっており、これが「一種の流動資本」とよばれるものにあたる。他方では、労働手段のような「本来の固定資本」に対応しその価値が一時に全部的に流通するという面でつかまれる流動資本が本来の流動資本だと考えられる。このようにみれば、『資本論』のような規定をうちだすのに必要な諸前提はほとんど出揃っており、そのために残っているのは、ノートのこうした諸研究を再整理して総括的に再考してみるということだけだとさえいいうるであろう。

そこでいままでの検討を概括してみよう。

素材（生産物）として流通に入るか生産過程に留まったままで消費されつくすかという「特殊的規定」での流動、固定資本の区別は、スミスらの資本の流通過程に関する誤った理解を根本的に批判する正しい理論的諸前提から引きだされたものである。この区別立ては、単に流通過程に固定している資本（流通資本）と生産過程に留まっている資本（生産資本）との区別という視点に留まらず、生産要素としての素材的諸契機が資本流通の形態規定にいかに入ってくるかという（古典派の根本的欠陥を批判する）視点を――したがって、生産資本の諸要素の価値が流通する仕方様式というあの決定的視点を――ふくんでおり、また事実、そういう特徴づけをも打ちだしえた区別立てである。しかも、この区別立ては、それが唯一のものとされているわけでなく、この基礎上で別箇の区別も考察されている。また、以上に引用した諸叙述（たとえば引用文17～20参照）をみるだけでも、そこには事実上流通資本と流動資本とを分別する視点がうちだされている。

したがって、当時における流動資本と固定資本のこうした区別立て（「特殊的規定」）は、流動資本と固定資本の諸問題、総じて資本の流通過程を正しく検討する土台になっていたし、『資本論』「第二部第一、二篇」の把握をうるためにも決定的に重要なものであったといわねばならない。

ただ、この区別立ては、それ自体としては流動資本と固定資本の区分だけでなく、流通資本と生産資本の区別づけにも共通しうる面をもっていた点で、本来の流動資本と固定資本の特質を規定するにはなお一般的、基礎的にすぎるものであった。それにもかかわらず、この基礎的な区別立てが主たるものとして強調され、このもとで流通資本に関する問題が一諸にあつかわれ、くわえて用語上で流通資本と流動資本の区別が行なわれていなかったところに、あた

かも流通資本と流動資本との混同として目に映ずる事態が生じうる理由があったと考えられるのである。

さてつぎに、以上で獲得した理解から、あらためて流動資本と流通資本の混同とみえる叙述のうち、最も代表的な二つのものをふりかえって検討してみよう。

その一つは貨幣に関するものである。

「スミスは貨幣について、これを流動資本（C.C.）と名づけるべきであるか、それとも固定資本と名づけるべきであるかに当惑している。貨幣は、それがつねに流通――それ自体総再生産の一契機――の用具として役だつかぎりでは、固定資本――流通用具としての――である。だが貨幣の使用価値それ自体は流通するということだけであって、本来的生産過程にも、個人的消費にも決して入りこむことはできない。貨幣はたえず流通過程に固定されている資本部分であって、この側面からみれば流動資本のもっとも完成された形態である。他方からみれば、貨幣は用具として固定されているから、固定資本である」（S. 604）。

周知のように、資本の流通上では貨幣は資本がその流通過程でとる諸形態の一つにすぎず、生産資本の流動的成分でもなければ、固定的成分でもない。貨幣は流動資本、固定資本価値のいずれもの担い手になりうるとはいえ、どちらの担い手になるかは生産資本の各要素の流通様式如何できめられるのである。スミスが貨幣を流動資本とすべきか固定資本とすべきかについて混乱しているのは、資本がその総過程で着たり脱いだりする形態区分とこの形態中の一つの内部における流通様式上での区分とを混同しているからである。（またこの混同は前述したような資本流通そのものの無理解にある）。

では、貨幣を一方で流通用具として固定資本だとのべ、他方でつねに流通部面にあるものとして流動資本だとのべ

ているマルクスのばあいはどうであろうか？　ここではスミス同様の「混同」が犯されているのであろうか？

これまでにえられた理解にたてば、明らかにそうではない。右のマルクスの叙述はつぎのごとく解するべきである。すなわち、

ここで貨幣がつねに流通局面にあるから「流動資本の完成形態」だとされるのは、流通資本という意味においてであり、また「流通用具として固定資本」だとされるのは、総過程の一契機に拘束されているという意味においてである。すでに示したように、『要綱』では、流動資本と固定資本は二重の規定――種々の諸形態を通じて運動しつづける価値主体という面とある形態に拘束される面からの規定（「一般的規定」）と、素材（生産物）として流通に入るか生産過程に留まったままで消費しつくされるかという面からの規定（「特殊的規定」）――をあたえられている。そして前者は、資本流通の区別　(1)総過程、(2)小流通、(3)大流通のうち(1)に属し流動、固定資本の「形態No.・1」、後者は(2)をもふくんだ(3)に属し「形態No.・3」と名づけられている。いま貨幣が「流動資本の完成形態」とされるばあいは、右の「特殊的規定」＝流動資本「形態No.・3」という面においてであり、「固定資本」だといわれるばあいは、「一般的規定」＝固定資本「形態No.・1」という面においてである。したがって、ここでは混同が犯されているどころか、こうした区分によってスミスの混同を批判する視点が示されていると解すべきなのである。

このことは、つぎの敍述からも明らかである。

「貨幣それ自体は、それが……たえず流通手段という形態に留まり、したがって他の諸局面を決して通過しないかぎりで、そうした理由によってスミスによって固定資本の従属形態（Afterform）とみなされている。同様にまた資本は、貨幣の形態で、流通から引きあげられた価値の形態で遊休し、固定される。……流動と固定という規定はさし

21

あたりは……二つの特殊な種類のかたちでの資本ではなくて、同一資本の異った形態上の諸規定以外のなにものでもないのであるが、このことは経済学において多くの混乱を引きおこしてきた。ある種の物質的生産物の一つの側面が固着したばあいに、この側面からみて、その生産物は流動資本であるというとすれば、反対の側面をあげて、反対にいうことも容易であろう」(S. 515—516)。

つぎに、「混同」のもう一つの代表例として検討を要するものは、「給養品」の流通に関する叙述である。

[22]「資本と労働力能のあいだの小流通。……この流通に入りこむ資本部分——給養品(Approvisionnement)——はすぐれて流動資本(C.C.)である」。「なぜなら、この部分は生産過程には決して入りこまないが、たえずこれに付随しているからである」(S. 570)。

[23]「賃銀として措定された資本部分」は、「瞬時も資本の再生産過程には入りこまない——こうしたことは原料についてはおこらない——部分である。労働者の給養品は生産過程から生産物として現われでるが、しかしそれはそのものとしては生産過程に決して入りこまない。なぜならそれは個人的消費にとっての完成生産物であって、労働者の消費に直接入りこみ、それ〈消費〉と直接交換されるからである。したがってそれこそは、原料や労働用具とは区別されて、すぐれて流通資本(das circulating capital)である」(S. 567)。その他引用文9、10、参照。

ところで右の引用文からいろいろな疑問が生じうる。

㋑ 「給養品」が「完成生産物」として直接個人的に消費されて生産過程に入らず、つねに流通面にある点で流動資本と規定されているのは、流動資本と流通資本との混同ではないか?

㋺ 固定資本たる労働手段に対応して、生産物=給養品が原材料と並行して流動資本とよばれていることも右の混

同を示しているのではないだろうか？（引用文9、10参照）。

㈥　給養品を流動資本の一要素とするのは、生産資本の要素にはなりえぬ給養品と、流動資本の可変的成分をなす労働力とを混同することになり、流動資本の規定のもとに可変資本という規定を葬ることになるのではないだろうか？[9]

㈢　引用文9、10にみられるように、生産物を給養品と同義によぶいいかたも奇妙ではないか？

（9）　こうした諸点について、山田鋭夫氏は論文「『経済学批判要綱』における流動資本と固定資本（上）」（『経済科学』第十五巻第三号所載）でつぎのようにのべられている。

「だがここに一見奇異なことは、『要綱』が、「原材料」とならんで「生産物」（……）を、流動資本成分として指摘していることである。……ここにはたしかに混同がある。しかもこの混同は二重だ。第一に用語法として、「生産物」をすぐれて個人的消費用生産物（……「給養品」）の意味に用いている点。[14] 第二に、生産局面からあゆみでて流通局面にのみ存在する資本たる「生産物」を、生産資本たる流動資本の成分として内容づけている点。……ここには明らかに、流動資本（Zirkulierendes Kapital）と流通資本（Zirkulations Kapital）との混同したがって両者の範疇的未確立が存在する」（P．71）。

氏のこの論文は、重要な疑念をふくみ、かつ、対象をやや異った視角から扱っているものとはいえ、今日までに『要綱』での流動資本と固定資本の諸規定をある程度丹念に検討した数少ないものの一つといえよう。対象についての私見との異同については、以後二、三の指摘をする以外にはいちいち指摘している余裕がないので割愛せざるをえない。

まず、㈠の疑問について。ここで給養品が原料とともに流動資本とされるのは、流動資本と固定資本の「特殊的規定」における区別立て――資本が素材として流通に入るか生産過程に留まって消費されつくすかという区別――によってである。そのことは、給養品という流動資本「形態No.・2」はその他の本来的流通にあるすべての流動資本「形態No.・3」にふくまれる（S．570）といわれていることからもわかる。そしてこの区別立ては、すでにみたように、流動資本にも流通資本にも共通する面を有しているから、給養品＝流動資本といわれているからといって、内容的にみて流通資本と流動資本との混同が犯されているとはいえない。とくに給養品が独自の流動資本（「形態No.・2」）とし

て強調されるのは、それがその素材形態からして生産資本の要素にはなりえないが、労働力能を維持、再生産する素材という面で「賃銀にあてられるべき資本」の素材をなし、つねに生産の外部でそれに付随して流通するという特徴をもっているからである（それはこの点で「すぐれて流通資本（circulating capital）」だともいわれる）。またこの流通が「小流通」として重視されているのは、この流通をとおして――それが労働力の資本による獲得と使用を可能にする面では「領有法則の回転」が生じ、給養品の購入と消費という面では（可変）資本の補塡と労働力の再生産が行なわれること、を明らかにするためである。さらにまた、こうしてここに「生きた労働力能とこれを維持するための自然的条件とに対する資本の関係によって――流動資本が使用価値の側面からも規定されているということ」（S.567）を明らかにしておくためである（こうした諸点を示している叙述については引用が長くなりすぎるので、ページ数と行数とをあげておくに留める。S.195, S.207〈L 24―29〉, S.448, S.487―488, S.565―573）。

それゆえ、ここで給養品が流動資本と規定されているのは、内容的には前述の特質をもつ商品＝流通資本という意味からであって、『資本論』でいわれる流動資本の意味においてではないのだから、内容的な混同が犯されているのではないと考えるべきであろう[10]（混同があったとすれば、それはすでにのべたかぎりにおいてである。本稿十二～十三ページ参照）。

疑問点㋺――労働手段＝固定資本に対応して「生産物」（＝給養品）と原材料が流動資本とされていることは、㋑と同様の混同を示していないか？　この点はすでに㋑の考察によって解決されている。補足しておけば、このさいの固定資本は、流通資本と生産資本との区分にも共通する例の区別立てによって規定されたもの――「第一の意義における固定資本」――である。

(10) 前掲山田論文では、給養品が「すぐれて流通資本である」という叙述中には、それが『資本論』での「流通資本（商品資本）であるということが、暗々裡に察知されてもいる」（P．72）という正しい指摘がみられる。しかし、このマルクスの観点は堅持されているわけではないという評価が、貨幣に関するさきの叙述（引用文4）から引きだれさている（P．74—75）点では私見と相当の距離があるようである。

疑問点㈥ ——「給養品」（「生産物」）を流動資本の一要素としているのは、生産要素にはなりえぬ「給養品」と流動資本の可変的成分たる労働力との混同を意味し、Vという規定をこのもとに葬ることになるのではないか？ ——という点について。

この点についても、そうではないという答をだすべきであろう。けだし第一に、内容的にみれば、給養品が本来の流動資本とされていないことはすでに明らかであるし、第二に、給養品は現実的な生産要素（生産資本の一要素）ともみなされてはいないからである。(11) また第三に、価値増殖に対する「給養品」と「労働力能」との本質的に相異なる役割についても明確な把握がみられるからである。たとえば、「資本に投下された労働と資本が充用する労働との大きな混同。労働力能と交換される資本である給養品——彼はここではそれを流動資本（C．C．）とよぶ——は、決してそれに投下されているよりも多くの労働を充用することできない」（S．448）という敍述もこのことを示している。

(11) 「労働手段、原材料、労働」という素材的契機は、「現実的過程としては、それ自体またもや単に素材的関連……資本の内容を構成する二つの素材的関連——にすぎない」（S．209）。資本は労働過程では「労働材料（……）、労働手段、および生きた労働として区分された」が「過程それ自体の内部では労働諸要素と他の二つの要素との区別は、形態からみて、単に一方が不変的諸価値として、また他方が価値産出的なものとして規定されるということだけであった」（S．592—583）。「生産で賃銀は、賃銀に転化されるべきものときめられた元本として、潜勢的な（virtuell）賃銀として一度だけ機能する。それが実際の賃銀のだんになるとそれは……労働者の所得として機能するにすぎない。だが賃銀と交換されるものはなにかといえば、労働力能である……」（S．487—488）。

㈢の疑念――「生産物」を「給養品」と同義によぶいい方について。『要綱』でマルクスがときとしてこういうのは、普通の意味での生産物としてではなく、「給養品」を生産物一般と混同する連中を批判したうえで、なおかつ、彼らの用語法をそのまま使ったばあいであると考えられる[12]（S．206―208参照）。

（12）この点は、すでに小林氏や山田論文によっても示されている（小林前掲論文P．86，山田論文前掲P．74，参照）。

第四章　総　括

（一）

『要綱』および「五九年プラン」における資本の流通過程について、これまでの全考察からいくつかの概括的結論をひきだしておこう。

まず、「流通とは、資本がその必然的な変態――資本の生活過程――のさまざまな概念的に規定された諸契機を経過することであるから、それは資本によって不可欠の条件、資本自身の本質によって措定された条件である」（S．550―551）という叙述からもわかるように、資本の流通過程は、一般的には、資本価値がその運動上でとらざるをえない諸変態（W―G、G―Wなる変態）という点で資本の本質的条件をなすものとしてつかまれている。だから資本の流通過程の考察は、こうした把握を、流通上での資本の形態諸規定を通じて内容的に深めてゆくことだといえよう。

ところで、当時の「流通篇」に関する考察をみると、その展開が流動資本と固定資本という概念諸規定をいわば「軸」にして行なわれているようにみえること、および再生産論が除外されていることが特徴的なこととして目につ

くであろう。

すでにみたように、流動資本の概念は、『資本論』の規定の範囲に留まらず、いわば「一般的規定」と「特殊的規定」とでもよびうるような二重の規定を有するものであった。すなわち、前者においては、一方で資本が種々の諸形態を通じて流動する主体として、他方で個々の諸形態に固定されるものとして、それぞれ流動資本、固定資本と規定された（このさいには、資本がどの形態に固定されるかということやその資本がどういう素材からなっているかということは度外視される）。後者においては、同一の資本が流動しつづけるものであると同時に固定される資本だということから進んで、資本が、二種類の特殊な形態へ分裂して実存するものとして――素材として生産局面に留まってそこで消費されつくす資本と使用価値としても流通局面にある資本として――規定された。

こうした二重の規定を通じて明らかにされようとした内容上の眼目はつぎの点にあったと考えられる。

「一般的規定」のばあい。㋑　資本は生産過程と流通過程との動的統一であり、この全過程を通じて種々の諸形態をとりつつ流動するなかで自己を維持、拡大する主体的価値であるから、連続性（連続した回転）を自分の本質的条件にするとともに、ある形態への固定性を自分の本質的制限として内包せざるをえない。㋺　このことは、諸変態に要する時間と費用――流通時間は価値減少時間として作用し流通費用は剰余価値からの控除をなす――という制限として現われる。流通時間が回転時間に影響を与え「価値増殖にとっての規定的一契機」（S．521）になり、それが「生産的であるかのような仮象」が生ずる（S．524）。他方、資本がその本性上で流動的であることが同時に一契機への固着をもふくまざるをえないとすれば、「資本は固定性の局面を短縮するべく種々の仕組みを発案」し（S．516）、「流通時間による資本の制限、資本の変態のさまざまな諸局面を通過すべき必然性」を「流通時間＝0（ゼロ）と措定」すること

によって止揚することをば自己の至上命令とする〔ここに、信用等の基本規定がある〕(S. 522)。

「特殊的規定」のばあい。㋑ 資本と賃労働との交換を独自の「小流通」として「大流通」(本来的流通一般)から区分するならば、資本の流通過程は「総過程」、「大流通」、「小流通」という区別でつかまれ、またそれに応じた流動資本、固定資本の相異なる区分が生ずるのでこれらを混同してはならない。㋺ 固定資本の再生産時間によって回転時間の単位や産業循環の期間が制約されるようになる、固定資本が巨大になるほど流動資本の回転速度の促進や生産の連続性が必然的条件になる等々、要するに流動資本と固定資本の相異なった運動によって資本の増殖過程、総運動が種々の影響をうけること。(14)

(14) 流動資本と固定資本の「特殊的規定」のもとでは、両資本の社会的意義についての考察——たとえば、労働の生産諸力が固定資本の属性として現れ、種々の労働相互の社会的関係が流動資本の属性として現れること、固定資本の発展は社会的生産力と富の発展尺度として現れること、また流動、固定両資本の発展を通じて現れる資本の歴史的傾向、等々の考察——が一つの重要な内容をなし、相当多くのスペースを占めている(前掲山田論文はこの点の考察に力点をおいている)。しかし、「五九年プラン」や『要綱』でこの考察が取り入れられているのは、この考察が流通過程に関する形態諸規定の中心的位置を占めているとみなされているからではない。それが取り入れられているのは、前篇「資本の生産過程」、「相対的剰余価値」の章——とくに「機械装置」の節——でのべられたこれと同主旨の考察をば、流通過程の流動資本、固定資本という運動で再確認し、より具体的にのべようとしたためであろう(拙論第一章注参照)。

以上の概括から「一般的規定」のもとでは、流通が資本の本質的条件ないし制限になることの内容が、質的な面でも量的な面でも一般的にあつかわれているのに対して、「特殊的規定」のもとでは、より具体的にあつかわれているということがわかる。つまり「一般的規定」にあっては、もともと資本は流通をへないと生産を更新できないし、変態のなかで自分を維持拡大する価値にほかならないのだという流通の質的意義(流通に制約されるものとしての資本そ

のものの規定）が明らかにされ、流通時間による制限の意味も、さしあたり種々の流通時間の相違を度外視した資本価値量全体にとっての価値減少時間一般としてあつかわれていることがわかる。

「資本の通過しなければならない諸変態の運動は、いまや生産過程それ自体の条件として、同様にまた結果として現れる。だから資本はその現実においては、あたえられた期間における一系列の回転として現れるのである。……だから資本の価値産出それ自体はつぎの理由から制約されたものとして現れる（そして価値は自己を永続化しまた倍化させる価値としてだけ資本である）。すなわち①質的制約。それは資本が流通の諸局面を通過しなければ、生産過程を更新することができないために。(2)量的制約。それは資本の産出する諸価値の分量が、あるあたえられた期間における資本の回転数によってきまるために。(3)このようにして流通時間は、二つの側面からみて制限的原理、生産時間の制限として現れ、またその反対であるために。だから資本は本質的に流動資本である」（S．532）。

つぎに「特殊的規定」にあっては、流通が資本の本質的条件ないし制限になるということの内容がより具体的にあつかわれる。このばあいには、前者では度外視されていた資本の素材的契機が流通の諸区別および流動、固定資本という資本の区別にとり入れられ、この相異なる二つの特殊的資本の運動形式にそくして、それらの資本の運動＝回転が価値増殖過程および再生産運動におよぼす諸作用があつかわれる。つまりここでは、資本の価値は一個の全体としてではなく異った二つの分量相互の関係としてあつかわれ、流通時間も種々な流通時間、回転の緩急としてとりあげられるわけである。

なお、この「特殊的規定」における流動資本と固定資本は、「一般的規定」における資本の矛盾――資本は本質的に流動的であるが同時に一形態に固定されざるをえないという矛盾――が、自ら、流動資本と固定資本という二種の

資本への分裂、並存という形でうみだすところの解決形態にほかならないといえよう。

ところで、以上の「一般的規定」と「特殊的規定」との関連は、『資本論』第二部「第一篇」と「第二篇」との関連に大筋で一致していると考えられる。

というのは、「第一篇、資本の姿態変換とその循環」では、㋑産業資本を三つの諸姿態および循環形式をとりつつ流動し増殖する主体的価値としてつかみ、そのさいの諸形態や循環の諸特質それ自体を考察し、㋺変態に要する時間と費用がもっている制限の一般的意義をつかむ（流通時間の相違は捨象する）という点が中心課題になっているのに対して、「第二篇　資本の回転」では、流通の制限作用をより具体的につかむために資本は本来流通する資本だという規定からさらにすすんで、生産資本の素材的契機によって規定される資本流通の二大形式（回転の二大形態としての流動資本と固定資本）を区別したうえで、[15] この二種の資本の回転が価値増殖にどのように作用するを究明することが中心課題になっているという関連があるからである[16]（また「一般的規定」が「第一篇」の産業資本概念の規定に共通していることは、すでに本稿第二章で明らかにしたところである）。

(15)　この点に関する『資本論』の叙述を示しておく。「われわれが（第一篇で――引用者）一般的にみてきたように、資本価値全体がたえず流通しているのであり、したがって、この意味ではすべての資本は流通資本（Zirkulierendes Kapital）である。しかし、ここで（第二篇――引用者）考察される資本部分の流通は独特なものである」（B.Ⅱ, S.159, 傍点引用者）。「われわれは、生産過程や価値増殖過程への回転の影響をもっと詳しく研究するまえに、流通過程から資本に付着しているその回転の形態に影響を与える二つの新たな形態を考察しなければならない」（Ibid, S. 157）。

(16)　「この第二部の第一篇では、資本がその循環中にとるいろいろな形態と、この循環そのもののさまざまな形態とが考察された。第一部で考察された労働期間に、今度は流通期間が加わる。第二篇では、循環が周期的な循環として、すなわち回転として考察された。一方では、資本の成分（固定資本と流動資本）が違うのにしたがって、それぞれの成分が諸形態の循環を

行なう時間が違い、その仕方が違うということが示された。他方では、労働期間や流通期間の長さの相違の条件となる諸事情が研究された。循環期間やその諸成分のいろいろな割合が生産過程そのものの規模や剰余価値の年率に及ぼす影響が明らかにされた。じっさい、第一篇では、資本が循環中に絶えずとっては捨てる相続く諸形態がおもに考察されたとすれば、第二篇では、諸形態のこの流れと連続とのなかで、与えられた大きさの一資本が、その割合は変わるにしても同時に生産資本、貨幣資本、商品資本という別々の形態に分かれ、したがってこれらの形態が互いに入れ替るだけではなく、総資本価値のいろいろな部分が絶えずこれらのさまざまに違った状態で相並んで存在し機能しているということが考察されたのである」(B.Ⅱ, S. 353, 訳P. 431−432)。

それゆえ、流動資本と固定資本の二重の規定を「軸」に展開されようとしている「五九年プラン」の理論的構成もまた、そのごく大筋においては『資本論』第二部の「第一篇」、「第二篇」の関連にほぼ照応しているとみなすことができる。

ちなみに、拙論の第一章では、同プランの全諸項目を便宜上三つに大別して整理したが、いまではこれをつぎのように簡素化してのべることができよう。

第一の部分は、一方で前篇（生産過程の分析）との関連で流通が資本の本質的条件をなしていることをごく一般的に指摘しつつ、流通をとおして現れる資本の「文明化傾向」（要するに世界市場を創出し生産の社会化を促進する資本の傾向）をのべ、他方で恐慌の基礎を明らかにする視点から流通と生産との諸矛盾を指摘しておく部分である。第二の部分は、主として、流動資本と固定資本の「一般的規定」にかかわる諸問題が明らかにされんとする部分、第三の部分は、「特殊的規定」にかかわる諸問題があつかわれようとする部分である。

なお、こうした区別について注意を要することは、その区別がまったく便宜的なものにすぎず、しかもプランの各諸項目下での理論的内容も前後入りくんだかたちになっており、判然とした区分づけや整理が行ないがたいというこ

とである（たとえば、この点は、「一般的規定」と「特殊的規定」が直接には項目⑮で一諸にあつかわれていることにも示されている）。したがって、第一の部分と第二の部分とを一諸にしたかたちでこれを第三の部分と対応させる整理の仕方もできるだろうし、ばあいによってはまた別様の整理もできるであろう。

ただ、いずれにしても、「プラン」の前半部分で「一般的規定」にかかわる問題があつかわれようとしているのに対して、後半部分では「特殊的規定」にかかわる問題があつかわれようとしているかぎりでは、前半と後半の関連は『資本論』の「第一篇」と「第二篇」の関係に対応しているということ、したがって、「五九年プラン」や『要綱』では流動資本と固定資本の諸規定をいわば「軸」にして分析が展開されようとしている点で一見『資本論』の展開とは異なるようにみえもするが、主たる内容とその大筋という点では一致しているのだということ、こうしたことだけは明確に断定することができる。(17)

(17) 「プラン」の第一の部分でのべられようとしている諸点のうち、恐慌の基礎を説くための部分（とくに項目②、⑥）は、同「プラン」での指示にしたがって『資本論』では除外されている。その他の部分の諸論点は、主として「第二部」の三つの篇で適時に指摘されている。したがって、かりに項目①～⑥を「プラン」の第一部分として区別づけるばあいには、この部分は『資本論』ではまとまったかたちでは叙述されずに適時論及されるようになった、といえよう。

ただし『要綱』や「五九年プラン」の該当部分と『資本論』の当該部分とがこうした関連にあるとしても、前者にあっては、三つの循環形式の考察がきわめて不十分であるとか、内容上で相異なる諸規定を流動資本、固定資本という同一の表現で示しているとか、さらにこの二つの資本の「特殊的規定」は『資本論』の規定とくらべて不十分であり、流通資本と流動資本との「混同」と思わせるような叙述をふくんでいる、等々の諸側面があることもいなみがたい。

しかし第一に、流動資本と固定資本の「特殊的規定」（両資本の区別立て）は、古典派経済学の資本流通に関する誤った把握を根本的に批判する正しい理論的諸前提から引き出されたものであって、単に流通資本と生産資本の区別という視点だけではなく生産要素の素材的契機がどのように資本流通上の形態規定に入ってくるかという観点――したがって事実上では生産資本の諸要素の素材的区別とそれらの価値の流通様式という視点――をもふくんでおり、内容的には流通資本と流動資本とを区分する観点を示している点では、理論的に誤っているどころか資本流通の考究にとって決定的に重要なものであった。

それゆえに、「混同」として目に映ずる叙述があるとしても、それは、この「特殊的規定」（両資本の区別立て）には流通資本と生産資本の区別立てにも共通しうる側面がある点で本来の流動、固定資本の特徴を規定するのに一般的すぎるにもかかわらず、この区別立てが主たるものとされ、そのもとで流通資本と流動資本にかかわる諸問題が一諸にあつかわれたからであり、かつまた用語上で流通資本と流動資本の区別がなかったからであるにすぎない。

第二に、そもそも流動資本、固定資本の概念は、すでにケネーにおいて「年前貸」（avances annuelles）と「原前貸」（avances primitives）というかたちで直接生産過程にある生産資本の分類としてつかまれていたが、それは借地農業者の資本という狭い立場からのものであった（彼の区分は生産資本内部での区分であるから貨幣を原前貸とか年前貸とか考えることは彼には思いもよらないことであった）。これに対してスミスは、個人と社会の「ストック」の分類を行なうさいに前貸の二つの範疇を流動資本、固定資本として一般化したが、そのさいケネーにあった正しい資本分類の基礎を放棄してしまい、流通資本と流動資本との混同を始め、多くの諸混乱をこの概念にもちこむにいたった。リカードのばあいにも、スミスの誤った影響を克服しえず、この概念のもとにCとVとの規定を埋没させたま

ま、その概念区分を主として利潤率の相違をもたらす資本構成の視点からあつかったのである。

総じて彼らにあっては、流動資本と固定資本という流通上の概念をあつかいながらも、資本の流通過程を資本価値の変態の問題として固有の対象にすえるという意味での流通過程論そのものがなかったのであって、リカードのばあいにおいてすら、いわば「分配論」が「生産論」から無媒介に、賃銀、利潤、利子、地代等の問題として論及されていたのである。このことは、価値を人間労働へ還元しえたとはいえ、商品に表示される労働の二面性、価値形態と商品の変態、剰余価値および不変資本と可変資本等々に関する無理解を基礎にして、彼らが資本の流通とはそもそもどういうことかという把握に失敗していたことを意味している。だからこうした欠陥を発見して資本の流通過程の解明を最初から行なわざるをえなかった当時のマルクスにとっては、なによりもまず、流通上の唯一の資本分類として現れる流動資本、固定資本という従来からの用語を継承しつつ、その概念を批判的に検討するなかでのみ流通過程の理論的展開をはからざるをえなかったのは、けだし当然のことであったといえよう。そしてこの概念の正しい二重の規定を土台にして始めて、三つの循環形態や資本の回転に関するより詳しい分析が可能になったのである。

（二）

つぎに、「Ⅰ資本の生産過程」と「Ⅲ資本と利潤」の両篇に対する「Ⅱ資本の流通過程」篇の位置ないし関連についての把握を概括しておこう。

まず、「Ⅰ資本の生産過程」との関連についての把握から。

資本は流通過程の両極――流通によって媒介される種々の生産部面――を支配する以前に流通過程で形成される。

商業資本の運動から端的にわかるように、「それ自体において考察すれば、流通は前提された両極の媒介である。だが流通はこの両極を措定しない。……流通はその背後で行なわれている過程の現象である」(S. 166)。

ところで、流通が独立して種々の生産部面の媒介をなしそれらを結びつけているということは、一方では流通がまだ生産を支配しないでそれに対して与えられた前提になっているという関係にあることをあらわし、他方では生産過程がまだ流通を自分の一契機として組みこんでいないことをあらわしている。だが、全生産物が資本家的商品として生産され、流通が資本家的商品の流通として行なわれるばあいには、右の事態が逆のかたちで現われることになる。つまり、資本家的生産のもとでは、「資本は生産過程を通じて始めて生成するのと同様に、資本が純粋な価値の形態……に再転化されるのは、流通の第一行為によってだけである。他方この行為の、すなわち〔資本の〕生活過程の反復が可能であるのは、貨幣と生産諸条件との交換を内容とし、生産行為の始りをなすところの流通の第二行為によってだけである」。だから「……資本の通過しなければならない諸変態の運動は、いまや生産過程それ自体の条件として、同様にまたそれらの結果として現れる」(S. 531−532)。「資本が始めて登場したときには、前提それ自身は……資本の発生のための外部的諸前提として現われた。それゆえ、資本の内在的本性から生じたものでなく、そこから説明のつかぬものであった。この外的諸前提は、いまや資本それ自体の運動の契機として現われ、その結果が、それらを……資本に固有の契機として前提するようになっている」(S. 354)。

以上のような立場から資本の生産過程の分析が行なわれるさいには、それはそれ自体として行なわれるのであり、流通過程は資本と賃労働との交換以外は単なる前提としてあつかわれる。しかし、生産過程の分析がすんだあとでは、流通が生産過程の不可欠な条件として、かつ、資本家的生産過程によって規定されるものとして固有の分析対象

にすえられることになる。このばあいには、流通の出発点たる商品が資本の担い手としての商品として、流通が、生産過程の反復を媒介する商品の実現および貨幣の資本への転化としてあつかわれるようになるのである。こうして、「Ⅱ資本の流通過程」たる「ここでは、流通の経済的諸区別、諸規定、諸契機だけが問題」とされ(S．517)、「単に資本の流通の形態諸規定だけが考察される」ことになる(S．564)。

なお一般的にみると、以上の握把は、「資本一般」から「資本の特殊性」への発展――すなわち「そのものとしての各種資本に共通し、またそれぞれの一定の価値額を資本にする……諸規定」(S．353)から、流動資本、固定資本という資本そのものの規定(同じ抽象の内部で「その特殊性の肯定であるか否定であるか」によって特徴づけられる規定)への発展――としてつかまえられており、同時にこの発展がまた、「資本が生成する現実的運動」(「資本の弁証法的発展過程」)という「萌芽からの発展」として把握されている(S．217)。

ここで、以上の理解を深める一助として、右のような把握に対する一論者の特異な見解(宇野弘蔵著『資本論研究』Ⅲ〈筑摩書房〉、該当箇所執筆者大内秀明氏)をみておこう。まず、この論者が「移行」の説明の例として指摘している『要綱』の叙述をあげておく。

「さて、すでにわれわれは、どのようにして価値増殖過程を通じて資本が(1)その価値を交換(すなわち生きた労働との交換)によって維持し、(2)増加し、剰余価値をつくりだしたかをみてきた。いまや生産過程と価値増殖過程の統一の結果として過程の生産物すなわち資本自体が現われるのであるが、生産物としては資本は、資本がその前提であったところの過程からでてきているのであり、また価値である生産物としてでてきている。いいかえるなら価値それ自体がこの過程の生産物として、しかもより大きな価値として現われる。……そのものとしてのこの価値は貨幣であ

る。しかしこのことは即時的にそうなのであって、……さしあたり措定され、現存しているものは一定の(観念的な)価格の商品である。すなわち、観念的にだけ一定貨幣額として存在しており、そして交換ではじめて貨幣額として実現されるべき、したがって貨幣として措定されるためにふたたび単純な流通に入りこまねばならない商品である。だからわれわれはいまや、資本が資本として措定される過程の第三の側面にくることになる」(S. 305—306)。

また、この論者が指摘する同主旨の叙述例には、『資本論』第一部の異文原稿の一部をなす『直接的生産過程の諸結果』と題する一八六三年草稿末尾のつぎの文章がある。

「直接的な資本家的生産過程の第一の成果である生産物は商品である。……商品として、資本の生産物は商品の交換過程に入らねばならず、これとともに現実的物質代謝に入るばかりでなく、同時に、われわれが商品の変態として説明したところの形態変換をへなければならない。単に形態的転化……が問題であるかぎり、この過程は、われわれが単純な流通と名づけた箇所……のなかですでにのべられている。だがいまやこれらの商品は同時に資本の担い手である。それらは、価値増殖された、剰余価値をふくんだ資本そのものである。そしてこの点において、商品の流通は、いまや同時に資本の再生産過程であって、商品流通の抽象的考察になかった、より進んだ諸規定をふくむのである。それゆえに、いまやわれわれは商品の流通を資本の流通過程として考察しなければならない。これは次巻(ブーフ)の仕事である」("Erstes Buch, Der Produktionsprozes des Kapital,Sechster Kapiter, Resultate des unmittelbaren Produktionsprozess" S. 458,『第一部資本の生産過程、第六章直接的生産過程の諸結果』、参照向坂訳〈岩波、『資本論要綱』所載〉P. 278)。

さて、この論者によると、これらの叙述には「第一巻を直接的生産過程の分析、それに対して**第二巻をW′のG′への実現過程という意味で資本の流通過程とするマルクスの構想**」が示されていることになる。そしてそういう構想では、

「直接的生産過程から区別された流通部面の考察が、もっぱら第二巻の対象ということになる。そのかぎりでは、**生産過程をも運動の一局面としてふくむ資本の循環過程の分析はすぐ展開されなくなる**」（前掲P．164．ゴチック引用者）という主張が行なわれている。

ところで現実に「五九年プラン」にせよ『要綱』にせよ、流通過程の考察がそういう構想に留められていないことは疑いもない事実であって、そのことはすでにこれまでの考察からはっきりしている。

たしかに前掲『要綱』の敍述では、「いまや生産過程はそれが流通に移行できぬかぎり、ぬきさしならぬものとなって現われる」（S．309）という恐慌の可能性等にかかわる「矛盾を確認する」（同）視角をふくんでいることもあって、とくに「W′—G′」という契機が強調されている。だがこの敍述も、生産資本との関連に関するあの把握——流通過程は資本の生産過程の前提だが、やがてその産物になりそれによって規定されるものとして現われ、それと同時に、生産過程も流通過程（G′—W′、W—G）を不可欠の条件にするようになるという把握——にもとづいていることはたしかである。したがってさきの敍述、つまり流通の出発点になる商品は資本家的生産の産物なのだからつぎに問題になる第三の側面はW′—G′だという『要綱』の「移行」に関する敍述からして、ただちに「Ⅱ流通過程」の分析対象はW′—G′とだけ規定されているかのように解されるのだとすれば、それはいささか強引だといわざるをえない。

『直接的生産過程の諸結果』末尾の文章にしてもそうである。ここにのべられていることは、「単に形態変換、つまりこれらの**商品の貨幣への転化および貨幣の商品への再転化**が問題であるかぎり、この過程は」単純流通のところでのべたが、商品が資本家的に生産されるかぎりではこの過程は「同時に資本の再生産過程であって……より進んだ諸規定をふくむ」から、つぎにこうした資本の流通過程を分析するのだということである。このことがかの論者の手

にかかると、「W—G、G—W」という同文中の言葉すら無視されて、「この末尾の文章では、要するに……その W′の G′への実現である『商品の流通を資本の流通過程』として論ずる」（前掲P．164，傍点引用者）——つまり第二巻の対象は W′の実現に限定されるというかたちで「移行」の説明が行なわれているかのようにのべられるのである。

こうした主張は、直接的生産過程を課題とする第一巻、それに「もとづくものとして第二巻を理解すれば、そこでの課題は、右の『直接的生産過程』の結果である……W′を実現する過程の分析になる」（前掲P．162）という形でも表現さている。もっとも、かりに第二巻では W′—G′のみならず G—W をふくんで資本家的流通が対象になっているのだといっても、なお、この論者は問題が未解決であることを主張するであろう。けだしこの論者の基本的な考え方は、直接的生産過程につづくものとして第二巻の課題を規定すれば、それが G—W をふくんでいても「直接的生産過程から区別された流通部面」にかぎられてしまいそのかぎりで「生産過程をも運動の一局面としてふくむ資本の循環過程の分析はすぐ展開されなくなる」（前掲P．164）という点にあるからである。

ところで、こうした点に当の論者の基本的な考え方があるとすれば、その考え方は、「資本の循環過程の解明」と「直接的生産過程とは区別された流通部面」の考察とは異っているという見解に帰着せざるをえない。そしてこれはまた、資本の流通過程と循環過程に関するおどろくべき無理解というよりほかはない。

そもそも流通が資本の流通をなすのは、G—W、W—G が独立する局面としてではなくて資本によって規定される関連においてであり、循環をなすかぎりにおいてである。「資本が流通過程で資本として現われるのは、ただ、全過程の関連のなかだけのことであり、……G—G′または W—W′のなかだけのことである」（K，B．Ⅲ，S．355，訳P．428）。資本家的「商品を販売し、それらの価値を貨幣に実現し、この貨幣をあらたに資本に転化し、そして同じこと

をたえず繰り返すこと。……**このつねに同じ継起的な段階を通過する循環が資本の流通をなすのである**」(K, B.I, S. 589, 訳P. 735, ゴチック—引用者)。

右の点を生産過程と流通過程との関連でいえば、資本は両者の統一にほかならずこの統一においてのみ資本になるのであるが、このさい、資本の流通過程は生産過程から区別される一局面であると同時に生産過程の反復を媒介する「再生産過程の形態をなす」(K, II, S.354, 訳P.432) 点では、すぐれて資本の循環過程にほかならないのである。換言すれば、資本の流通過程はその循環の一局面として現われるが、資本価値の運動を表示し媒介する形態の変換としては、そのうちに生産過程をもつつみこんだものとして現われざるをえないのであって、この意味で資本の循環過程は流通過程そのものなのである。

したがって、生産過程を分析したあとで、それと区別される流通過程をとりあげることは、生産過程の内的機構をそれ自体として分析しないことを意味すると同時に、流通局面による再生産の媒介と流通形態による実体の隠蔽、包摂の究明をも意味するのであって、この究明がそのままぴったりと資本の循環過程の究明に帰着するのである。したがってまた、「移行」の説明に関して、生産過程の分析後に現れるWはW′であり今後は直接的生産過程と区別された流通過程をあつかうのだという主旨の叙述をもって、かかる説き方が循環の分析を排除しているものであるとしか解しえないのだとすれば、むしろそうとしか解しえない側の思考循環にこそ問題があるといえよう。

つぎに「Ⅲ資本と利潤」との関係について。

流通過程が資本の一過程に組みこまれ、資本の運動が生産過程と流通過程との統一において現れるようになると、直接的生産過程の産物たる剰余価値はこの過程との直接的関連においてではなく、右の統一における運動との関連に

おいて現れる、つまり利潤形態をとって現れる。したがって「Ⅱ流通過程」は、「Ⅰ生産過程」につづいて流通過程をとりあげ、それによる生産過程の制限、再生産の媒介、価値増殖機構の隠蔽、等々の諸作用を考察するなかで右の統一を明らかにする点で「Ⅰ」から剰余価値の利潤への転形、剰余価値の分岐形態をあつかう「Ⅲ」への橋渡しをなすものとしてつかまれているといえよう。「流通が、直接的生産過程の外部における資本の運動が、資本の再生産過程へとり入れられるこにによって、剰余価値はもはや労働に対する単純な直接的なその関係によって措定されたものとしては現れない。この関係はむしろ資本の全体運動の一契機として現れるにすぎない。……したがって資本は、もはやあらたに生産された価値をその現実の尺度、剰余労働の必要労働に対する割合によっては測らず、それの前提としての自己自身で測る。……そのように測られた剰余価値、そのように自己を増殖する価値として措定された資本は――利潤である」(S. 631―632)。

「資本はいまや生産と流通との統一として措定される……。一方では生きた労働時間を自らのうちに吸収することにより、そしてそれ自らに属する流通の運動(……)によって資本は新価値をうむものとして、価値を生産するものとして自分自身に関係する」(S. 631)。

こうした三つの篇の関係に関する理解は、以上のかぎりでは『資本論』にも共通している。ただし『要綱』のばあいには、「生産過程と流通過程の統一」がうみだす剰余価値の分岐を論ずるといっても、「資本一般」のプランにしたがって、一般的利潤率や生産価格の形成の問題は「資本一般」の範囲外にある「多数の資本」(「競争篇」)に属することとされている(S. 252, S.978, S.646―647, etc.)。商品資本と貨幣資本の商品取引資本および貨幣取引資本への転形、商業利潤の考察も「五九年プラン」にはみあたらない。さらに地代も「資本一般」の範囲外であるとされて

いる（一八五八年四月二日付、エンゲルスへの手紙）。ただ利子のばあいは「利子と利潤」と題してあつかわれるプランが示されているが、それも「現実的諸資本への通過点（übergang）をなしている」かぎりにおいてである（S.353）。

さらに、『要綱』では再生産論（『資本論』二巻三篇にあたる）を欠いたままで「生産過程と流通過程との統一」たる資本の運動過程から剰余価値の利潤への転形が説かれているのに、『資本論』のばあいには、第二巻「ことに第三篇で……資本家的生産過程を全体としてみればそれは生産過程と流通過程との**統一だということが明らかになった**」うえで、「統一」としての資本の全体運動から「転形」が説かれるというかたちになっている。

「第一部では、それ自体としてみられた資本主義的生産過程が直接的生産過程として示している諸現象が研究された……。しかし、このような直接的生産過程で資本の生涯は終わるのではない。それは現実の世界では流通過程によって補われるのであって、この流通過程は第二部の研究対象だった。第二部では、ことに第三篇で、社会的再生産過程の媒介としての流通過程の考察にさいして、資本主義的生産過程を全体としてみればそれは生産過程との統一だということが明らかになった。この第三部で行われることは、この統一について一般的反省を試みることではありえない。……むしろ全体としてみた資本の運動過程からでてくる具体的な諸形態をみいだして敍述することである」（K, B.Ⅲ, S.33）。

そこで、剰余価値の利潤への転形は再生産論を欠いたまま説きうるかどうか、できるとすれば右の『資本論』の文章「ことに第三篇では……云々」という意味をどのように理解すればよいかという疑問が生じうる。(18)

(18) かつて私は、この点について肯定的な主張をしたさいに、宇野弘蔵氏の見解を批判したことがある（「再生産論の成立について」『立教経済学研究』第二〇巻第三号 P.136—137）。それにふれて桜井毅氏は、「第三巻冒頭の敍述についても

『再生産論を欠いたままで利潤の展開が計られ』うるというような理解をもって（宇野氏の――引用者）『無理解』を指摘するのであって、それはかえって、『社会的総資本の再生産と流通』の意義を理解しえないことになる……」という批判めいた寸計をのべられている（前掲『資本論研究』Ⅲ、P．215）。

剰余価値の利潤への転形が行われるのは、つぎのようにしてである。

労働力の価値が労働の価格として現れることにより、投下資本のV部分は生産に支出されたすべての労働の価格を支払う資本として現れるから、この資本部分と生産手段に投下された資本部分との区別はただ素材的に違う生産要素に支払われたという点だけとなって、CとVとの区別が失われてしまう。さらに流通過程が介入することにより、流動資本形態のもとへVの本質的機能が埋没せしめられ、流通期間と労働期間が一様に剰余価値を規定するようにみえる。こうして資本家にとっては、消費された生産手段と充用された労働力の価格を補う価値部分は、ただその商品が資本に費やさせたものを補うだけであり、彼の費用価格をなすものとして現れ、同時に剰余価値は流通でえられるところの費用価格をこえる販売価格として現れる。このようにして生産過程における価値変化の根源がV部分から総資本に移され、費用価格をこえる超過分が投下資本の全運用過程から一様に生ずるようにみえることになれば、かかる表象的産物としての剰余価値は利潤という転化形態をうけとらざるをえない。つまり資本家は、自分の総資本をば超過分を獲得するためにのみ一様に投下し運用するのであり、この投下総資本との関係でつかまれた剰余価値が利潤なのである。

こうした「転形」に関する大筋の説明それ自体においては、流通を通じての全生産物相互の「物質代謝」＝相互補塡の諸条件に関する解明は直接必要にはならない。もし不可欠だとすれば、最も後期に解明された再生産論（早くとも一八六二年以降）よりも以前のマルクスの利潤論は根本的に誤っていたことにもなるであろう。

それでは、第二部第三篇で資本家的生産過程が全体としては生産過程と流通過程との統一であることが明らかになったが、第三部ではこの全体としての資本の運動から生ずる具体的諸形態をあつかう――という第三部冒頭の例の叙述はどう解すべきだろうか？

もともとこの冒頭の文章がマルクスの原文どおりのものではなくてエンゲルスの手で修正されたものだということは、[19] この叙述部分に関する当面の問題を考察するうえでも看過しえぬ事実であるが、しかしこの点は一応さしおくこととしよう。

(19) 新版全集第二十五巻三十五ページに提示されているマルクス自身の草稿（第一ページ部分）の写真と、同三十九ページに提示されているエンゲルスの編集用草稿（同第一ページ部分）の写真とを比較してみると、エンゲルスのは二人の筆跡からなり、上部の独立した文章の十一行は彼のものだが、他の部分はマルクスのものをエンゲルスの秘書が転書したものだということがわかる（同全集ロシア語版同箇所参照）。そこでそれらを判読すると、現行版冒頭の一行目から十行目までの文章は一部分を残してエンゲルスのものだということがわかる。なお右の事実は、佐藤金三郎氏からの私信によって教えていただいた事実である。

「第三篇で……統一であることが明らかにされた」という意味は、第一篇および第二篇のように総資本を一つの資本としてあつかうのではなく、総資本内部での諸資本相互の補塡＝再生産関係を流通がいかに媒介するかという視角から「統一であること」を明らかにしたという意味に解すべきである。つまり、「統一であること」がいかなる視点から内容的につかまれるかということが問題なのであって、ちなみに「統一であること」はすでに第二部第一篇、第二篇においても資本価値の変態と循環、回転という視角から明らかにされている。ただ第三篇の分析をへることによって、第一、第二篇での「統一であること」ないしは「全体としてみると総資本の流通はその再生産過程をなす」という把握が、諸資本相互の補塡関係というその内的態容においてより立ち入ってつかまれるのである。しかし、ここ

まで立ち入って「統一であること」が明らかにならないかぎり「転形」を説きえないといえばそうではない。この点は、本来そのものとしての利潤が一つの資本の自己自身の関係にほかならぬことを想起するだけでも容易に理解しうるはずであろう。なお、再生産論を欠いても利潤論を説きうるからといって、第三巻に対して再生産論のもつ意義が失われるものでない点は、すでに以前の論稿（前掲「再生産論の成立について」立教経済学研究第二十巻第三号一三七～一三八ページ）で具体的に指摘しておいたとおりである。

（最初の予定では、はしがきおよび目次にも示したように、補章として再生産論に関する諸論述の検討を追加するつもりであったが、本論総括の終りで制限紙数になってしまった。このあと補章の部分だけを本稿の題目のもとに独立してあとまわしにするのは、多少とも不自然な感をまぬがれがたいので、題目をあらためて独立の論稿にでもすることとしたい。御諒了をいただきたい）。